

## 壺にはまった回答

## マルコ10:2～16 / 李正雨師

誰だとは言えませんが、うちの息子の中で一番上の息子は、最近、私に何かの魂胆を持って質問することがあります。例えば、普通の家庭のように、うちも子供たちがスマートフォンでユーチューブやゲームをする時間がある程度決まっています。もちろん、十分な時間を与えていると思いますが、子供たちにとっては、スマートフォンで遊ぶ時間がいつも足りないと思っているでしょう。普段、子供たちが学校や幼稚園に通っている時は、スマートフォンを使う時間があまり多くありません。それで、学校の宿題が終わったら、スマートフォンで遊ぶことができるようにしています。問題になるのは、夏休みの時です。朝から晩まで、親がやめさせないと、一日中スマートフォンだけに夢中になっています。夏休みのある日のことです。子供たちが朝からスマートフォンをしていましたが、夏休みだから3～4時間くらいしたい放題にさせておきました。そして夏休みの宿題をさせました。皆さんもご存知のように、小学校低学年の夏休みの宿題は、多くありません。間もなく、長男が私のところに来て、こう尋ねました。「パパ、パパは僕が宿題をやったら、スマートフォンしてもいいと言ったでしょう。」、「うん、そう言ったよ。」、「僕、宿題を全部やったけど…」

長男の話は、間違いではありません。確かに宿題をやったら、スマートフォンしてもいいと許したことがあります。しかしそれは、学校に通っている時のことであり、夏休み中は違うでしょう。朝からスマートフォンをしていた子供に、宿題をやったとしても、続いてスマートフォンを使うように許してくれる親はいないでしょう。それで、私がいけないと答えたら、長男はパパが約束を守らないとぶすぶすと文句を言って、結局は、お母さんに叱られました。多分お父さんを欺いてはならないということを学んだのだと思います。今日の福音書にも、これと似た話が出てきます。ファリサイ派の人々がイエスさまに離婚することについて尋ねる言葉です。しかし、この質問には裏がありました。一つは、イエスさまに従おうとしている人々に分裂を起こさせようとしたことであり、もう一つは、イエスさまを政治的に縛り付けようとしたことです。今日の福音書はこのように始まります。「ファリサイ派の人々が近寄って、『夫が妻を離婚することは、律法に適っているでしょうか』と尋ねた。イエスを試そうとしたのである(2節)。」

律法を研究して守っているファリサイ派の人々が、律法が語っている離婚について知らないわけがないでしょう。しかし、ファリサイ派の人々は、この質問をイエスさまにしました。そして、彼らが質問をしたところには、大勢の人々が集まっていました。そこは、ユダヤ地域でした。今日の福音書の前の節であるマルコによる福音書10章1節の言葉です。「イエスはそこを立ち去って、ユダヤ地方とヨルダン川の向こう側に行かれた。群衆がまた集まって来たので、イエスは再びいつものように教えておられた。」イエスさまは、ご自分の活動地域から離れ、ユダヤ地域のヨルダン川に向かって行かれました。ユダヤ地域とヨルダン川は、イエスさまの主な活動地域ではありません。イエスさまは、主に、ガリラヤ地域で活動なさり、ユダヤ地域とヨルダン川では、洗礼者ヨハネが活動しました。そして、当時のイエスさまには、洗礼者ヨハネの後を継ぐ預言者という言葉がついていました。つまり、ユダヤ地域でイエスさまの周りに集まった人々は、洗礼者ヨハネに従っていた人々の可能性が高いということです。イエスさまは、そのような彼らに福音と神の国について教えられたのです。ところが、そのような場で、ファリサイ派の人々はイエスさまに、突然離婚について尋ねます。そして、2節にこの質問は、イエスさまを試そうとしたのであると書かれています。なぜファリサイ派の人々は、離婚について質問し、なぜこの質問は、イエスさまを試そうとすることになったのでしょうか。それは、洗礼者ヨハネがヘロデの離婚と再婚を指摘し、それによって殺されたからです。

ファリサイ派の人々のこの鋭い質問は、イエスさまを十分に困難にすることができたと思います。イエスさまが離婚してもいいとおっしゃったら、洗礼者ヨハネの弟子たちをつまづかせることになり、離婚してはならないとおっしゃったら、ヘロデに憎まれて殺されるかもしれません。どちらを選んでも、イエスさまにとってはよくはありませんでした。このような状況でイエスさまはモーセが離婚について何と命じたかをお尋ねになります。するとファリサイ派の人々は「モーセは、離婚状を書いて離婚することを許しました(4節)」と答えます。この答えはもっともらしいことでした。ヘロデの離婚と再婚を認めながらも、律法に触

れないことでした。しかしこれは、とても政治的な答えであり、洗礼者ヨハネの死を欺いていた答えでした。

彼らの答えに、イエスさまはこの律法の意図が何なのかを教えてください。今日の福音書5節で、イエスさまは、モーセがこのように掟を書いたのは、あなたたちの心が頑固だからだと言われます。この頑固だという言葉の意味は、申命記24章を見れば分かります。モーセは申命記24章1節で離婚についてこう言います。「人が妻をめとり、その夫となつてから、妻に何か恥ずべきことを見だし、気に入らなくなったときは、**離縁状を書いて彼女の手渡し、家を去らせる。**」ここで、恥ずべきことというのは何でしょうか。当時、ユダヤ教の代表的な学派であるシャムマイとヒレル学派は、このように解釈しました。「**結婚前に不貞を働くこと(シャムマイ)**」と「**夫の気に入らないこと(ヒレル)**。」このような解釈からみると、モーセは、離婚について寛容な立場を取るようです。しかし、イエスさまは、「**あなたたちの心が頑固なので**」と言われます。つまり、モーセがこの掟を書いたのは、離婚制度を通して当時の弱者であった女性を守るためだということです。夫に愛されない結婚生活を防ぐため、ひいては神さまが定められた一体となる家庭を作るため、モーセは、離婚を許したのです。なぜなら、離婚状を持っていれば、他の人の妻になることができるからです(申命記24:2)。

今日の福音書7~9節で、イエスさまはこう言われます。「**人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従つて、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。**」イエスさまのこの言葉は、創世記2章24節の御言葉です。この言葉は、モーセに律法が与えられる前に、最初の人に与えられた言葉であるだけでなく、結婚に対する神さまの御心が現れた言葉です。すべての律法よりも上にある御言葉なので、ファリサイ派の人々は、この答えにあらを探ることができませんでした。イエスさまはこのお答えを通して、裏を隠して来たファリサイ派の人々鼻を折られました。そして、洗礼者ヨハネの死が決して無駄なことではないことを、ヨハネの弟子たちの前で示されました。

しかし、イエスさまの教えは、これで終わるものではありませんでした。10節で、弟子たちは、家に戻つてからこのことについてイエスさまにまた尋ねたと書かれています。するとイエスさまはこう言われます。11~12節の言葉です。「**妻を離婚して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。夫を離婚して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる。**」この言葉は、弟子たちだけに教えられたことでした。そして同時に、この教えは、ヘロデとヘロディアの過ちを指摘して裁くことでした。彼らは、洗礼者ヨハネを殺す犯罪を犯しただけでなく、前妻と前夫と離婚する罪も犯しました。先日の説教で申し上げたように、彼らの結婚は、愛が前提とされている結婚ではありませんでした。ヘロディアはユダヤの祭司長と王の血統でした。彼女の母親が祭司長系列の王女だったからです。ヘロデはこのことを政治的に利用したかったのだと思います。ヘロディアも権力の中心から押し出されている自分の夫より、権力の欲があるヘロデがより魅力的だったでしょう。だから、律法をよく知っている家門の人でしたが、律法に背いて夫と離婚し、ヘロデと再婚したのです。ちなみに、日本語の聖書には、「**離婚する**」と書かれています。King James version聖書と韓国語の聖書には、「**捨てる (put away)**」と書かれています。そして、原語で書かれている「**アポリュイサイ**」も「**捨てる**」という意味に近いです。ヘロデとヘロディアは、自分たちの権力のために、自分たちの妻と夫を捨てたのです。

裏を隠してイエスさまのところに来たファリサイ派の人々、裏を隠して妻と夫を捨てたヘロデとヘロディア。彼らは自分のために、自分たちの欠点を隠すために、イエスさまを十字架につけて、洗礼者ヨハネの首をはねました。罪を隠すためには、もっと大きな罪が必要になるしかないでしょう。自分だけの人生、自分のために罪を犯すことすら厭わない生活の中では、どんな良いものも見つけることができないのです。だからイエスさまは、「**子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない (15節)**」と言われたのだと思います。純粹に神の言葉に従い、受け入れなければ、自分の欲が自らを飲み込んでしまうこともあるからです。イエスさまは下心があったファリサイ派の人々の質問にも、真の神の御心によって答えてくださいました。人間はいつも自分の欲に従って生きていますが、イエスさまはこのように人間にも、神さまの御心が何なのかを教えてください。それで私たちも、神さまの御心に従って生きていくことができるのだと思っています。私たちに正しい道を教え、導いてくださるイエスさまにいつまでも栄光がありますように。いつも神さまの御心を求めて、生きていく私たちになりますように、主の御名によつ

て祈ります。アーメン